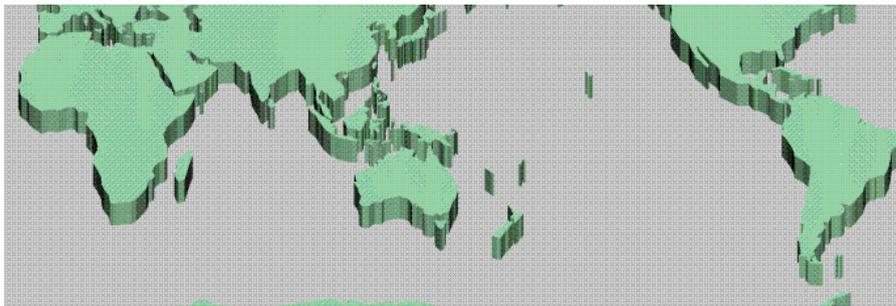


ニュースレター 第9号

2010年9月発行

科学研究費補助金基盤研究(A)

大学における宗教文化教育の実質化を図る システム構築



目次

1. 2010年度第1回宗教文化教育に関する
研究会報告 2
2. 2010年度第2回全体会議報告 2
3. 公開ワークショップ「宗教学教育の
現状と課題」報告 3
4. 宗教文化の授業研究会活動報告 7
5. お知らせ 8

1. 2010 年度第 1 回宗教文化教育に関する研究会報告

日時：2010 年 7 月 31 日（土）16:00 ～ 19:00

会場：國學院大學学術メディアセンター 5 階 06 会議室

出席者：科研メンバー、パイロット校からの担当者、スタッフを含め、計 15 名

議事内容

司会進行の井上順孝氏より、これまでの経緯の説明と今後の予定の説明があり、続いて以下の点について意見交換がなされた。

(1) 宗教文化教育推進センターの件

センター長、運営委員、連携委員、事務局について基本的な案を議論した。

(2) パイロット校における体制について

以下の事項について基本方針が議された。

- ・今年度秋から各大学において学生に告知できる体制を作っていく。

10 月頃に宗教文化教育推進センターのホームページが公開予定であるので、そこから基本的情報が得られることを学生に伝える。

- ・センターのホームページには、各大学の該当科目の一覧等の情報がリンクできることを確認した。

- ・科目認定はセンターが行なうという形式をとることを確認した。

(3) 認定試験について

認定試験についての議論の結果、以下のように原案がまとめられた。

- ・受験資格は大学 3 年以上とする。卒業生

の場合は、卒業後 1 年以内（第 1 回認定試験のみ 2 年以内、すなわち 2010 年 3 月卒業生まで受験可）とする。さらに到達目標に対応する科目を 16 単位以上取得していること（12 単位以上取得済みで、残りの単位は取得見込みでも受験可）で受験が可能。なお、科目等履修生や帰国子女などに関しては、ケースバイケースで対応していく。

- ・実施時期については、2011 年 5 月もしくは 6 月に第 1 回認定試験を開催し、以後、年 2 回のペースで行なっていく。試験会場は、首都圏 1ヶ所とし、それ以外の地域では各パイロット校で実施する。

- ・試験内容は、50 問の選択式と 1 問の記述式とする。記述式は 3 つの課題のうちから 1 つを選ぶなどして、600-800 字程度で記述してもらい、合否判定のみを行なう。

- ・資格取得にかかる費用に関しては、受験料 5,000 円、認定料 5,000 円を適切とする案を提起した。

そのほか認定試験の難易度や内容、試験用の参考書などについても議論がなされた。

(4) 倫理規定について

年内に原案を作成することとなった。

2. 2010 年度 第 2 回全体会議報告

日時：2010 年 9 月 2 日（木）17:00 ～ 17:30

会場：大正大学 1 号館 2 階大会議室

出席者：研究代表者の星野英紀氏（大正大学教授）のほか、研究分担者、連携研究者、

ワークショップ登壇者、研究補助者を含め、計 24 名

議事内容

(1) 第 1 回宗教文化教育に関する研究会の報告と検討

(2) サンプル問題作成の件

(3) 日本宗教学会での提案の件

2010 年 9 月 4 日の日本宗教学会学術大会の会員総会において、同学会に宗教文化士認定に関する連携学会となる件についての承認を求める旨の報告がなされた。

(4) 10 月 2 日の公開講演会・3 日の国際研究フォーラムの件

ともに本科研との共催である下記の 2 つの催しについての告知がなされた。

・公開学術講演会「現代イスラームと日本社会」(2010 年 10 月 2 日 15:00 ~ 17:00)

・国際研究フォーラム「イスラームと向かい合う日本社会」(2010 年 10 月 3 日 10:00 ~ 17:30)

そのほか、12 月 11 日(土)に開かれる予定の公開講演会についての検討し、会場は國學院大學とすることが決定した。

3. 公開ワークショップ 「宗教学教育の現状と課題 —宗教文化士制度発足に向けて—」

報告

日時：2010 年 9 月 2 日(木) 13:00 ~ 18:00

会場：大正大学 1 号館 2 階大会議室

企画：本科研第 3 グループ

発題者(発題順)：

丹羽泉氏(東京外国語大学)、大谷栄一氏(佛教大学)、釈徹宗氏(相愛大学)、新屋重彦氏(成蹊大学)、木村敏明氏(東北大学)、土井健司氏(関西学院大学)、黒崎浩行氏(國學院大學)、岡田正彦氏(天理大学)

コメンテーター：

鈴木俊之氏(青山学院女子短期大学)

井上順孝氏(國學院大學)

司会・アンケート結果報告者：

藤原聖子氏(大正大学)

趣旨

本ワークショップは、諸大学の宗教学教育の現状と課題について議論し、宗教文化士制度の意義を再確認すること、また宗教文化教育の推進・宗教文化士制度の導入の上で各大学にどのような問題が生じているかを把握し、解決策を検討することを目指した。ワークショップ終了後は、宗教文化士制度加入を検討している大学関係者を対象に、説明会を行った。

討議内容

①アンケート結果の報告

まず、司会の藤原氏が趣旨説明をし、さらにアンケートの分析結果を報告した。このアンケートは、今年 6 月から 7 月にかけて、本科研のメンバーの所属大学ならびに宗教文化士パイロット校を対象に実施したものである(回答者は科研メンバー、パイロット校の担当者)。内容は、各大学において開講されている、宗教学関係の授業の種類と数、過去 10 年間のカリキュラムや授業方法の変化、現

在直面している教育上の問題を尋ねるものであった。

その結果として明らかになったことを、主点のみ挙げるならば以下のとおりである（詳細な分析結果は、後日、科研報告書として公表する予定である）。

A 開講されている関連授業の数と種類

・宗教学・宗教文化教育の授業の開講数は、大学により違いが大きく、また宗教系大学の場合は、その大学の設立宗教・宗派を扱う授業が、他の宗教を扱う授業よりも多いという傾向は顕著である。さらに、カリキュラムのスリム化（科目数削減）を行っている大学では、宗教文化教育関係の授業を増やすことには限界がある。これらを鑑みると、宗教文化士制度への加入を拡大するためには、単位互換制度等の導入・活用は不可欠である。同一大学内で所属学部・学科を異にする教員同士の連携促進も課題である。

・パイロット校検討側では、神学的・宗派教育的な授業は、宗教文化士の科目として認定されるのか、どの程度まで宗派色が許容されるのかが知りたいことのひとつである。

B カリキュラム・教育内容における近年の変化とその原因

・ヴィジュアル教材を多用するなど、学力の二極化に対する対策・興味喚起の策がとられている。

・現代社会の宗教のあり方や、ニュース等に焦点を当てた、社会的有用性の高い授業が増えている。

・神学・教学系（聖職者養成用）カリキュラムにおいて、増加する一般学生のために、一般的な関心に合った授業を増やしている。

また、聖職を目指す学生に対しても、宗教文化教育授業を増やしている。

・総体的には、大学によって差はあるが、宗教文化教育は徐々に盛んになってきていることが確認できた。その（カリキュラム上の）原因としては、大学院に進学しない学生や聖職志望ではない学生が宗教学科や神学科に増えていることが挙げられる。そのような学生に社会人教養としての宗教学の授業を提供する必要から、宗教文化教育が広がっているのである。

C 宗教学教育・宗教文化教育の当面の課題

・宗教学教育・宗教文化教育の学習成果の明示化と、その成果をどう評価するか、またどうキャリア意識に結びつけるかが、今、現場で検討されており、それらに宗教文化士制度をどう絡ませられるかが課題である。

すなわち、「宗教文化士の資格をとると、社会に出てから何ができるのか」を、漠然とした「国際舞台で知識が生かせる」程度の説明ではなく、学生が具体的にイメージできるほどに明示化する必要がある。また、大学4年間の学習成果の評価を、数値化することが今後求められていきそうだが、それに宗教文化士制度を上手に組み込みたいという要望がある。

・広く万遍なく基礎的宗教知識を身につけさせたい宗教文化士用教育と、他の能力・知識（ジェネリックスキルの場合も専門知識・技能の場合もある）を身につけさせたい教育とのジレンマの解消も課題である。あるいは2タイプの学生がいる（専門／一般の違いや、学力差）場合の焦点のあわせかたが模索されている。

②事例報告

続いて、8名の発題者が、アンケート結果を踏まえ、各々の所属大学の事例をさらに詳しく報告した。8名中4名の大学はパイロット校（東北大学、関西学院大学、國學院大學、天理大学）、他4名の大学は加入検討校（東京外国語大学、佛教大学、相愛大学、成蹊大学）である。

A 東京外国語大学

東京外国語大学の宗教学教育・宗教文化教育の状況については、丹羽泉氏から報告があった。学生は特定の地域を専門とするが、授業は、地域の壁を越えて履修できることが、宗教文化士制度加入の上では大きな利点となっている。また、「宗教学」という名称の科目が5コマ開講されているが、宗教学講座に専任の教員のポストはないこと、授業名が「地域研究」の場合は、内容が恒常的に宗教に関わるものとなることは保証されないことなどが、加入の上での懸念事項として示された。

B 佛教大学

佛教大学の状況については、大谷栄一氏から報告があった。宗教文化教育の面では、京都という地域性を活かした京都学、フィールドワーク重視といった特徴がある。宗教文化士制度加入の上では、仏教中心の講義が多いこと（他宗教の扱いが少ないこと）が課題だが、京都コンソーシアムの活用によって改善する可能性がある。また、同大では通信教育課程が充実しているため、その利用も考えられる。学内で理解を得ていくには、キャリア形成の上での有用性を示すことが必要であるという問題提起もなされた。

C 相愛大学の事例

相愛大学の状況については、釈徹宗氏が

ら報告があった。同大は、学生募集の点で課題を抱えており、特色ある教育を打ち出すべく検討した結果、来年から人文学部に仏教文化学科を新設することになった。その教育理念は、仏教を学んで自らの人生を切り開くことであり、「まちに出る」ことを重視する内容である。本学科は真宗コースと仏教文化コースから成るが、これを構想するにあたって、宗教文化教育・宗教文化士の発想は参考になるものであったことが述べられた。

D 成蹊大学

成蹊大学の状況については、新屋重彦氏から報告があった。同大では、国際文化学科と現代社会学科において、宗教（学）関係の授業が開講されている。宗教研究を専門とする専任は3名である。課題としては、大学教育全体が実学的傾向を強めているが、これに警鐘を鳴らし、批判的主体となりうる学生を育てることである。宗教学関係の授業は削減の危機に晒されているという問題がある。宗教文化士の制度化を通じて、目先の実益を追うのではなく、（宗教学の蓄積を活かした）真の教養が社会で役立つようになることを強く期待している。

E 東北大学

東北大学の状況については、木村敏明氏から報告があった。同大の文学部には20ほどの専修があり、宗教学専修では約60名の所属学生に4名の教員がつき、指導体制が明確であるという特徴がある。しかし、個々の授業は他専修の学生も受講し、さらに学部から大学院まで多様なレベルの受講生がいる、また、大学院進学ではなく就職を選ぶ学生が割合として増えているといった受講生の多様化が、授業改革を促している。たとえば、

講読の授業を、学年別に設け、学部向には宗教学の古典ではなく、現代の宗教現象に関する文献をテキストとして選んでいるといった具体的な説明がなされた。

F 関西学院大学

関西学院大学の状況については、土井健司氏から報告があった。同大の神学部でも学生の多様化、ないし二極化が指導上の問題点となっているが、宗教文化教育の充実化を含む「開かれた神学教育」を目指し、本年度からカリキュラムを改定した。神学部の授業に社会学部で開講されている授業を含めれば、バランスのとれた宗教文化士用カリキュラムを組むことができる。また、同大の特徴の1つである、ジョイント・ディグリー制度を活用する学生が増えるならば、神学部の授業をとり、宗教文化士の資格をとる学生も増える可能性があることが述べられた。

G 國學院大學

國學院大學の状況については、黒崎浩行氏から報告があった。同大には、宗教文化士のための科目はすでに十分に開講されており、今後は宗教文化に関する説明能力を身につけた学生が、社会の中でそれをどう活かすことができるかを可視化することで、キャリアデザイン教育に結びつけることが課題である。副専攻として宗教文化を選択する学生が、実際にはどのような動機を持っているかといったことも紹介された。また、神道文化学部内の神職の後継者を対象とする教育でも、伝統文化の保護・マネジメントを通じて地域社会に貢献できるような新しい人材育成が目指されていることが述べられた。

H 天理大学

天理大学の状況については、岡田正彦氏から報告があった。近年の教育上の課題としては、中退者が増えたことがあり、対策としては、初学年から学生と教員の関係を密にすることが図られている。そして、宗教学と天理教学の有機的連関という目標を、カリキュラム・授業の中でいかに実現するかについて弛まぬ努力がなされている。また、世界情勢と世界の諸宗教について理解を深めるという宗教文化士の目標は、海外布教師育成から始まった建学の目的にも合致するものであり、制度を積極的に活用していきたい旨が語られた。

③コメント・ディスカッション

以上の事例報告に対して、二人のコメントから質問・総評がなされた。

比較教育学（高等教育・宗教教育）を専門とする鈴木俊之氏からは、国内外の学士課程教育改革と宗教文化士制度の関係について質問があった。すなわち、現在の教育改革では、到達目標から逆算してカリキュラムを構成すること、知識を身に付けた上で、それを使って何ができるかまでが学習成果として問われるようになっていることが特徴である。さらに、日本学術会議においては、専門分野別の参照基準の設置が進められている。この状況に照らすと、宗教文化士の認定試験は、宗教学の学習成果の測定（宗教学という分野の「学士力」の測定）のように見えるのだが、学士力との違いを明確化する必要があるのではないかという質問であった。

これを受けて、井上順孝氏は、宗教文化士は宗教学全体をカバーするものではない、

言い換えればこの制度は既存の宗教学教育・プラスαの発想であると説明した。さらに、最も重要なのは、「宗教について考えることは重要だ」という認識を社会に広げていくことである、それには個々の宗教学者が努力するだけでは限界があるので、協力してこの資格を立ち上げ、そこから一大ムーブメントを起こすしかないと強調し、制度の基本理念を再確認した。制度への加入に関して、発題者の個々の大学が直面している課題も、おおむね解決可能なものであるという示唆が続いた。

フロアからも、学士力と宗教文化士の関係について意見が出された（日本学術会議連携会員の土屋博氏、宗教研究諸学会連合委員長長の星野英紀氏等）。比較対象として、カナダ・トロント市の Ontario Multifaith Council という NPO 団体で、Multifaith Certificate という資格（民族的に多様な市民の信仰の自由を守るために活動するチャプレンやワーカーが取得する資格）の試験のために用いられているテキストも紹介され、宗教文化士とその取得のための学習内容の特色を、さらに明確にすることができた。

4. 宗教文化の授業研究会活動報告

第3回宗教文化の授業研究会

日時：2010年7月4日（日）13:00-17:00
場所：國學院大學学術メディアセンター5階会議室06
テーマ：「宗教の授業と調査法」

発表者：川又俊則氏（鈴鹿短期大学）

木村敏明氏（東北大学）

内容：川又氏は「社会調査実習としての宗教調査―「2001年度の試み」とその後」と題して、川又氏自身のフィールドである現代日本のキリスト教を対象とした社会調査実習の授業展開と学生の反応、問題点を報告した。ディスカッションでは、宗教をテーマに選ぶさいに求められる教員の専門的資質と学生の最低限の能力、宗教文化教育としてはただ身の周りの多様な宗教現象を見に行くということによいのではないか、といった意見が交わされた。

木村氏は、「集団合宿調査の理念と現実―東北大学宗教学研究室「宗教学実習」のとりくみ」と題し、「活きた宗教」の理解を目標として行われている集団合宿調査をとりあげ、調査の実際と問題点を報告した。近年は、学生が主体的にテーマを掲げることが難しくなっているという。

ディスカッションでは、学生に求める問題意識として、現地調査のテクニカルな面と宗教現象の内容面のどちらに力点がおかれているか、といった意見が交わされた。

第4回宗教文化の授業研究会

日時：2010年9月12日（日）10:30-13:00
場所：國學院大學学術メディアセンター5階会議室06

テーマ：「調査映像を授業にどう使うか」

発表者：井上順孝氏（國學院大學）

コメンテーター：西村明氏（鹿児島大学）

内容：井上氏は1970年代に8ミリカメラを調査に持参して以来、より利便性にすぐれた映像記録ツールに乗り換えつつ、撮影した映

像を授業に使ってきた経験を振り返り、授業で使うさいの配慮と、映像記録と発信がより手軽になっていくこれからの展望を報告した。

コメンテーターの西村氏は、現場の臨場感を教室に伝えるという映像メディアの利点を踏まえつつも、映像の信憑性を判断するリテラシーをどうみがくか、と問うた。ディスカッションでは、学生の反応や調査映像の貸し借り・共有の可能性について議論した。

5. お知らせ

(1) 公開講演会

國學院大學研究開発推進機構主催

本科研が共催

演題 「現代イスラームと日本社会」

講師：小杉泰氏（京都大学教授）

日時：2010年10月2日（土）15:00～17:00

場所：國學院大學學術メディアセンター1階
常磐松ホール

(2) 国際研究フォーラム

國學院大學研究開発推進機構日本文化研究所の主催、本科研が共催

テーマ：「イスラームと向かい合う日本社会」

日時：2010年10月3日（日）10:00～17:30

場所：國學院大學學術メディアセンター1階
常磐松ホール

パネリスト：三木英氏（大阪国際大学）、中西俊裕氏（日本経済新聞社）、Isam Hamza氏（エジプト、カイロ大学）、Salih Yucel氏（オーストラリア、モナッシュ大学）、Gritt Klinkhammer氏（ドイツ、ブレーメン大学）

コメンテーター：師岡カリマ・エルサムニー氏

司会：井上順孝氏（國學院大學）

(3) 講演会とワークショップ

日時 2010年12月11日（土）

①公開講演会 13:00～14:20

井門隆夫氏（ツーリズム・マーケティング研究所主任研究員）「観光と宗教」

場所：國學院大學學術メディアセンター1階・常磐松ホール

②ワークショップ 14:30～17:45 「

テーマ「宗教文化教育の現代的教材を探る」
発題 第2グループ共同発表「構築中の教材とその展開をめぐって（仮題）」

コメントと総合討議（コメントは4名程度・各10分以内を予定）

司会 星野英紀氏

場所 國學院大學學術メディアセンター5階・06会議室

科学研究費補助金基盤研究（A）

「大学における宗教文化教育の実質化を図るシステム構築」

（研究代表者 星野英紀）

発行 大正大学、國學院大學、大阪国際大学、大阪大学

発行日 2010年9月30日

URL：<http://www2.kokugakuin.ac.jp/shukyobunka/index.html>

E-mail：infoshubun@kokugakuin.ac.jp